村田京子著
『イメージで読み解くフランス文学　近代小説とジェンダー』

（水声社、2019年）

岡部 杏子
OKABÉ, Kyoko

全5章から成る本書は、ジェンダーの観点から、近代フランス文学を読み解いた最先端の研究成果である。第1章から第4章までは、既成のジェンダー価値観を転覆する「危険な女」について、そして第5章では、「男らしさ」という概念が「両性具有的存在」の精緻な分析をつうじて明らかにされている。スタール夫人の『コリンヌ』（1807）からはじまり、ゾラの『獲物の分け前』（1872）を中継点として、ラシルドの『ヴィーナス氏』（1889）に終わる。この構成によって、19世紀フランス小説に描かれる「危険な女」像の変遷および「両性具有的存在」に対する価値観の推移を通史的に俯瞰することができる。複数の小説が扱われる章においても、作品が出版年順に扱われており、一人の作家が女性登場人物を時代の推移とともに進化させていった過程をたどることができる。

こうした本書の冒頭を飾るのが、スタール夫人の『コリンヌ』である。ヒロインは、物語のはじめで神の言葉を受け取る「シビュラ」に擬えられている。このアポロンの巫女が持つ異教性と英雄性が、ローマの風土や文化の特性にのみ起源を持つものではなく、女の天才というジェンダー規範を逸脱したコリンヌの悲劇の予兆として機能していることが、作中に現れる絵画や彫刻の分析をつうじて論証されている。とりわけ興味深いのは、絵画や彫刻が登場人物の身体的・精神的特徴にとどまらず、彼らの心の移り変わりをも象徴しているという指摘である。この観点に立つことで、『コリンヌ』に描かれる芸術作品が、単に古代文化の豊穣さや異教性を際立たせるだけでなく、小説世界の時間に起伏をつけ、あたかも「物語る」ように機能していることがわかるのである。

第2章では、バルザックの初期作品『砂漠の情熱』（1832）から、『娼婦盛衰記』（1847）の娼婦像を補助線として、晩年の作品『従妹ベット』（1846）までに描かれる「宿命の女」像の変遷が提示されている。この章を貫いているのは、ジェンダー規範を逸脱した「危険な女」が体現する「獣性」、「官能性」、「エクゾティスム」、「去勢の危険性」である。彼女たちはこれらを自在に扱い、「女優」のように役柄を演じ分け、男を欲望と恐怖へと陥れていると著者は指摘し、『砂漠の情熱』の「女豹」にバルザックの「宿命の女」像の原型を見出している。続いて、『従妹ベット』における二人のクルチザンヌ、ジョゼファとヴァレリーの危険性が分析されている。作中で、ジョゼファとヴァレリーは、それぞれ「旧約聖書」に描かれるユーディットとデリラのイメージと重ね合わされている。著者はそのイメージの源泉を絵画と彫刻から仔細に読み解き、テクストと照合することで、二人のクルチザンヌが対照的な「宿命の女」であることを明解に示している。

第3章、第4章ではゾラの小説における「危険な女」が論じられている。第3章では、「どこにでもいるありふれた娼婦」を描くことを目指したゾラによる「金髪のヴィーナス」ナナと、反アカデミー

的な画風が物議を醸したマネの「オランピア」の分析をつうじて、「もぐりの下級娼婦」が社会の規範を揺るがす危険な存在であることが明らかにされている。本章における女の危険性とは、とりわけその「獣性」によって「見る男 / 見られる女」というジェンダーに即した関係を解体し、男性に性への恐怖を抱かせ、男女関係を転覆させる力である。このような力を持つ娼婦像を公衆の眼前に出現させることが、単なる題材の新規性にとどまらず、男の幻想の産物としての「キッチュな」女性美への異議申し立てであることが解き明かされている。

そして第4章では、『獲物の分け前』（1872）の女主人公ルネをめぐって、資本主義社会における女性の「モノ化」の諸相が論じられている。本章の基軸となる主題は「モード」である。その範疇は服飾から、家具や調度品、少女の玩具である人形など、多岐に渡っており、女の身体を美しく飾るはずの事物が、逆に女を室内に埋もれさせ、精神的な自律性をも喪失させ「モノ化」される様が緻密な分析をつうじて鮮やかに立証されている。

第5章では、まず「両性具有的存在」を描いた1830年前後に刊行された5つの小説が、次に19世紀後半の2つの小説が取り上げられている。著者は、ヴィンケルマンの美学を参照項として、ラトゥシュの『フラゴレッタ』（1829）、バルザックの『サラジーヌ』（1831）、ゴーティエの『モーパン嬢』（1835）、バルザックの『金色の眼の娘』（1835）における「両性具有的存在」を、身体描写に主眼を置き、絵画の表象と絡めながら読み解いている。なかでも興味深いのは、「両性具有」が男の「理想美」の一要素たりうるという指摘が、ダヴィッドの絵画「バラの死」の美少年像の分析から導出されている点である。著者が指摘しているように、ダヴィッドは「男らしさ」の巧みな表現者であり、本書でも度々登場する「男らしさ」の体現者ナポレオン・ボナパルトの御用画家でもあったからである。そのダヴィッドによる少年像を筆頭に、男の「若さ」を源とする曲線美を備えた「両性具有的存在」が、芸術作品においては、男の「理想美」の範疇に加わるが、現実世界においては忌むべき「怪物」とされる両義的な存在であることが明証されている。そして、この二つの側面のうち「怪物性」のみが生き延び、世紀末文学においては「男らしさ」の欠如であり、「堕落」の象徴を意味することが『獲物の分け前』と『ヴィーナス氏』（1889）の分析によって明確化されている。

このように、本書に登場するのは、「男らしさ」の属性のひとつである「理性」をかき乱し、男を弱体化させ、その性役割を簒奪する力の持ち主である。「危険な女たち」は、「男性 / 女性」、「公 / 私」といった、ジェンダー規範を撹乱し、既成の価値観を転倒させることにより、男たちの恐怖を引き起こす。「両性具有的存在」は、未成熟な身体が表象する女らしい美によって、男が自分の物差しで測れない存在に対して抱く怯えが計り知れないことを露呈させる。著者は、絵画や彫刻などの分析を近代フランス小説の文脈と照合することで、古代ギリシャ・ローマ文化、キリスト教を源泉とする伝統的な寓意が、テクストのなかで、いかに巧みにヒロインの現代性を象徴しているかを明証している。

以上、本書の全体の流れをみてきた。とりわけ注目すべきは、「両性具有的存在」が「男らしさ」の観点から分析されている第5章であろう。ジェンダーの観点から、両性具有という存在を読み解いた研究は、日本はもちろんフランスにおいても他に類を見ない。本書をとおして、読者は近代フランスの文学空間のなかで、絵画や彫刻といった「物言わぬ静物」が、実に雄弁に読者に語りかけているその声に耳を傾けることができる。